＜2025年７月７日号 内航海運新聞掲載＞

第10回「内航船の日」（7月15日）

10年目にみえてきた 内航海運ＰＲのヒント

内航海運新聞（令和７年７月７日号）での記事を紹介いたします。　以下転載

第10回「内航船の日」（7月15日）

10年目にみえてきた『内航海運ＰＲのヒント』

全日本内航船員の会　事務局長　松見 準

7月15日、記念日「内航船の日」は10回目を迎えます。

この記念日は、２０１５年、ＳＮＳを中心に盛り上がった「内航海運を応援したい」という陸の一般市民の動きが、日本記念日協会への申請にまでつながったものです。その背景にはＳＮＳで内航海運の存在をアピールする当時の船員たちの姿がありました。

東日本大震災時の頃に洋上から何も支援できなかったという個人的な無力感を覚えている船員も多く、産業としての責任や社会的な役割について深く考えさせられた時期です。震災直前まで、政府によるカボタージュ規制撤廃の議論、つまり日本人船員にとっては外航同様に「日本人船員は不要」ととらえられるような議論が、本格的に進められていたことも、現職の船員たちの職業としてのプライドを傷つけていました。

だからこそ、船員たちの内航海運ＰＲは「まず市民社会に知ってもらう」から始まりました。すぐに多くの一般の人が、内航海運が意外にも大きな物流シェアを担っていることや、このままでは船員が足りなくなり、自国の制度も守りきれなくなるという心配を共感するようになりました。

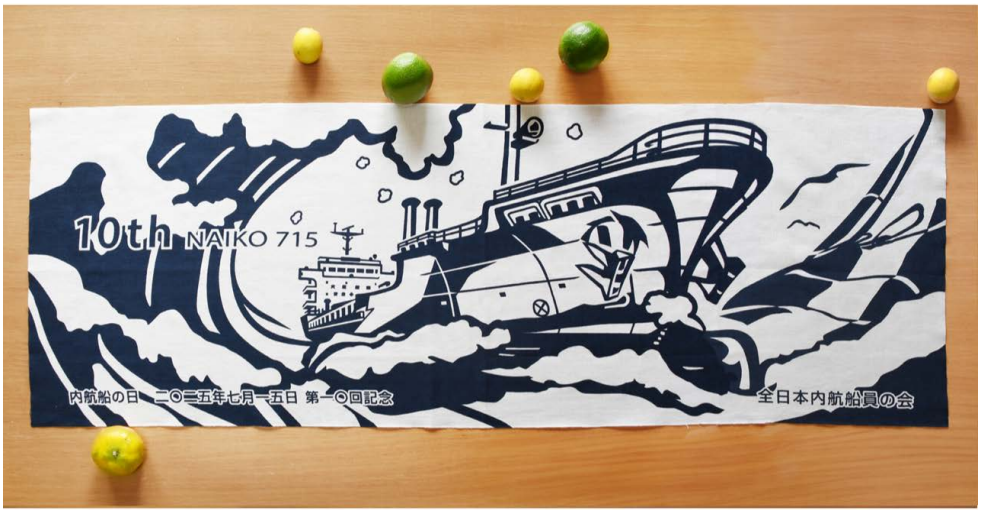
記念日を贈ってもらった内航海運側として、何も反応をしないわけにはいかない。そんな想いから、慌てて記念日第1回目から、近所の銭湯での「海から届ける写真展」を計画し、記念日の手ぬぐいも発表しました。「海から届ける写真展」は洋上の船員たちから陸の人に見せたい「船員の海」を撮って送ってもらい、陸の一般の人に「内航船」を知ってもらう試みです。毎年、内航海運産業と市民社会との希少な接点となっています。当時、ＳＮＳ上での過剰な盛り上がりが生んだ小さな騒動もありましたが、たくさんの記念日応援の声と一緒に乗り越えていきました。

今年の写真展チラシ

第1回目の記念日手ぬぐいのテーマは「海風」。「感謝の真っ只中で自己紹介」という感じでした。日々、陸のために海を越えてくる海運業にとって、市民社会から記念日を贈ってもらえるというのは、これ以上ない最高の出来事でしょう。ＳＮＳ時代ならではで、島国にふさわしい、自慢の記念日と言ってよいと思います。

今年第 10 回目になってもテーマは「大感謝」に。

第 10 回記念日手ぬぐい



これまでのテーマの移り変わりから、内航海運ＰＲの歩みを振り返ってみます。

第2回目も「感謝」。そして第3回目で「アピール！」と順調に自己紹介を続けています。そして第4回目では「底力！」。この頃、全国で大雨などの自然災害による甚大な被害が頻発しています。鉄道や道路が寸断される中、内航船が緊急対応で日本の物流を支えていました。第5回目は「真正面」。新型コロナに苦しむ島国日本の市民生活を、海から守り続ける内航船と内航船員の勇姿を「真っ正面」と伝えました。

その後、世界中で経済の立て直しが始まると、次第にテーマは第6回目「次へ！」、第7回目「乗り越える」、第8回目「再起」へと続き、内航海運ＰＲが市民社会と寄り添いながら課題を乗り越えていく産業へと社会性を帯びていきます。そして昨年、第9回目は「未来へ向かってるのではない。未来を作っている」。実証実験船をモデルにした手ぬぐいのデザインで、日本の未来のエネルギー課題に取り組んでいる内航業界の姿を市民社会にアピールしています。

「感謝」から「大感謝！」へ。この 10 年で「知られていない産業」から「社会性を意識する産業」へとＰＲが激変していました。ＰＲ活動は、社会の中で育てられていくものだと知りました。

はじめは手探りです。優秀な日本人船員、瀬戸内をとおせる、タフ、屈強。しかし、そんなことを言っても、誰も船員に憧れはしません。「農家は大変」と言いながら、「農業をやりませんか！」と伝えるようなものです。こういう失敗は意外によくあるものです。

内航海運ＰＲのつもりが自分の会社のアピールだったり、ただの海のうんちく紹介だったり。残念ながら、まだまだ内航海運産業全体を見渡し、業界全体を盛り上げていくことができていないと感じるＰＲ活動も多い。小さな会社が大半を占める業界ですので、内航海運をＰＲする時には、内航海運全体の発展を意識してほしいと思います。

また、課題解決には労使の立場を超えて取り組んでいく意識も必要だと感じています。例えば、「海から届ける写真展」について、「船員とは立場が違う」と話す事業者さんもおられました。意外にも大きな会社の方ではなかったので、業界内での課題解決に対する温度差と複雑さに深刻な状況も感じます。

今後の内航海運はまだ経験したことのない新しい状況へ入っていくことを、すべての内航関係者には意識してほしいと思います。長く暗い内航船の時代がありました。多くの課題を抱えたまま、緊急雇用対策や国際漁業など、社会情勢の変化の中で仕方なく外航船から内航船に移ってきた船員たちによって、船員不足の課題だけを乗り切った時代です。暗い現場に若者は居着かず、産業内の改善を置き去りにしたまま高齢化が進んでいきました。再びの船員不足。しかし、これから内航船に乗り込む人は、内航船に憧れて来る船員たちです。すべての内航船の全乗組員が、こういった思いを持つ船員になります。その未来に応える現場、そしてＰＲが求められています。

～10 回目の記念日を前に、ようやく内航海運ＰＲの方向や形、目標についてのヒントが見えてきた～

ＳＮＳで最初に「内航船の日」を提唱した芸術家・谷川夏樹さんは、当時、乗船取材を終えた後、内航船を紹介する絵本「かもつせんのいちにち」（福音館書店）を刊行しました。船内勤務の様子がリアルで美しく、大人の海事関係者が見ても満足できる作品になりました。当時、全国の船処の船主組合も大量に購入し、学校に寄贈するなど話題になりました。

さて、この絵本。例えば子供に読んで聞かせる人は、乗船経験のない陸のお母さんやお父さんでしょう。その時に、お母さんやお父さんが、海運の現場をイメージして子供に読み聞かせることができるのは「絵本特有」の役割のおかげです。この仕組みのＰＲを私たちは見落としています。海運現場の魅力や情報をＰＲした後に、陸の誰もが「誰かに伝えることのできる仕組み」。現実的には、絵本ではない場合は「共感」が極めて重要になるのだと考えますが、この「仕組み」を作ることこそが最重要の目標と言えます。

写真展を 10 年開催してきた墨田地域では、内航船を知っている、内航海運を応援したいと思ってくれる市民がきっと多いはずです。その事実は、本当に大きな成果だと改めて認識しています。

今年の「海から届ける写真展」は墨田区内のカフェバー「ＣＡＦＥ＆ＢＡＲ　ＬＯＢＯ」で開催してもらいます。なんと、店主のバーテンダーが真剣に「内航船の日カクテル」を３種も考案してくれました。東京スカイツリーすぐ近く、夏の東京観光と併せて、ぜひ足を運んでみてください。

CAFE&BAR LOBO

「海から届ける写真展ｉｎ ＬＯＢＯ 」開催概要

◇開催期間＝7月 15 日（火）～ 31 日（木）
◇開催場所＝ＣＡＦＥ＆ＢＡＲ　ＬＯＢＯ
（東京都墨田区業平２―５―３）
https://www.hotpepper.jp/strJ003985003/
※東京メトロ半蔵門線、東武伊勢崎線、都営浅草線、京成押上線「押上駅Ｂ２出口」より徒歩４分
◇営業時間＝カフェタイム　13 時～ 17 時 30 分
／バータイム　18 時～ 23 時／日曜定休
※ワンドリンクの注文にご協力ください。

「内航船の日」記念日手ぬぐいを読者プレゼント！

全日本内航船員の会の松見準事務局長のご厚意により、「内航船の日」記念手ぬぐい（写真）を読者５名様にプレゼントします。この記念手ぬぐいは、毎年限定１００本が販売され、すぐに完売するという大人気の一品です。ご希望の方は、件名を「内航船の日・読者プレゼント」とし、①住所②氏名③連絡先（携帯電話番号等）④「内航船の日」に向けた応援メッセージ―を明記の上、Ｅメール（info@naikou.co.jp）までご応募ください。応募締め切りは8月1日（金）。当選の発表は、賞品の発送をもってかえさせていただきます。